

澁谷 鎮明* 杓谷 茂樹** ウルリッヒ メーワルト***
 Shizuaki SHIBUYA* Shigeki SHAKUYA** Ulrich MÖHWALD***



台湾からの訪日客の観光スタイルに関する一考察

A Study on Travel Behavior of Inbound Tourists from Taiwan

1. はじめに

日本の多くの観光地では、インバウンド観光、すなわち海外からの観光客の受け入れについて配慮することが一般的になりつつあり、このことはすでに国家的方針になっていると言ってもよい。平成26年度の『観光白書』においても、目標であった訪日外国人旅行者数1,000万人を25年度に達成しており、さらに平成26年度の施策として「インバウンド観光のさらなる推進」が、観光に関する主要な施策の一つとなっている。

その中で、最も日本に観光に来ている人々が、台湾からの訪日客であると言われる。これは、2,300万人の人口を持つ台湾から日本を観光目的で訪問している延べ人数は120万人を超えており、人口に比して訪日観光客数が非常に高い国であると考えられるためである。そのため、日本のインバウンド観光を考える上でその特性を知ることは非常に重要であると考えられる。後述するように、このような台湾からの訪日客の日本観光の特徴については、大まかにとらえられているものの、彼らの社会的背景などについてはまだ十分に理解できていない部分があるように思われる。また台湾からの観光客は、既往の研究や各種の報告書において調査研究がなされているものの、近年中国本土からの訪日客に関する関心が高まったためか、現時点で訪日観光者数1位・2位を占める韓国・台湾については、やや等閑視されているように思われる。

またこのことは、観光地サイドから見て、台湾からの訪日客が、中国本土からの訪日客とともに「中国人」とひとくくりにされることでその動向が見えにくくなっていることも一因ではないかと考えられる。

これまで筆者らは、このような台湾からの訪日客の動きについて、研究を進めてきている。張・澁谷(2008)は、華人系訪日客のパッケージ観光ツアー商品にみるルートと訪問地の分析を通じ、団体旅行のルートと訪問地について分析した。また、筆者らの岐阜県高山市における訪日客の分析により、台湾からの多くの観光客が訪れているにもかかわらず、バスに乗って「通過」するケースが多いためか、現地ではそのイメージがやや希薄であることが理解された(澁谷、2013b)。

このような台湾からの訪日客は、数も多く、各地域において重要な役割を果たしているにも関わらず、やや「見えにくい」存在であるように思われる。本稿では、このような台湾人客の動向の一端を明らかにすべく、筆者らがこれまで行った予備的なインタビュー調査の結果について整理し、具体的な事例を基礎資料として提示しつつ、台湾からの日本観光について、その観光行動の特性を中心として考察してみたい。

なお、本稿の内容は、筆者らが実施してきた2010年より2013年にかけての台湾におけるインタビュー調査によるものである。集中的な調査ではないため、一つ一つのインタビューにや

*中部大学国際関係学部中国語中国関係学科 **中部大学国際関係学部国際文化学科 ***中部大学国際関係学部国際文化学科

や時間的な開きがあるものの、この間に台湾側でドラスティックな変化は生じていないと考えられるため、おおよその動向をとらえるためには十分に参考になると思われる。

2. 台湾からの訪日観光客の概要

次に、具体的な事例を提示する前に、おおまかに観光に関する台湾の状況と、各種報告書や文献にあらわれる台湾からの訪日観光客の情報について整理し、確認しておきたい。

台湾の外国旅行者数は、2012年度に1,000万人を超え、2013年には1,100万人に到達し、増加傾向にある。日本観光局（JNTO）の『国際観光白書』（2010年）によると、台湾の出国率は35.2%（2009年）で他国に比して高い。これは国土が狭いことも影響して、外国旅行が一般的なレジャーとして定着しているためとされる。台湾からの外国旅行者の渡航先は、表1に示すように、中国大陆、日本、香港、タイ、マカオ、韓国などが上位を占めている。特に中国大陆への旅行者は、2009年より中国大陆への直行定期便が就航したことなどから、増加傾向にあるが、その多くは商用客である。このうち、日本への旅行者は、中国大陆、香港に次ぐ多さである。2010年の東日本大震災による減少があったが、その後再度増加傾向となり、2013年には約230万人に達し、香港への出国

者を超えた。さらにこれら日本への旅行者のうち、8割～9割程度が観光客であり、日本のインバウンド観光の中軸をなす重要な人々であると言える。なお、この訪問客増加の契機は、2005年以降の訪日査証免除措置や、2008年以降の航空便の拡充であったとされる。

これら台湾から日本を訪れる観光客については、いくつかの特性があるものと指摘される。上述の『国際観光白書』によると、その観光形態は55%が「ガイド付き団体旅行」であり、訪日観光客を出発地別に分類した場合、中国本土について2位であるということである。その一方で、日本観光のリピーターが77%に達しており、そのため次第に一般的な団体旅行に飽き足らず、個人旅行を希望する人や、団体旅行でも内容に新鮮味があるツアーを求めるようになっていく。さらには、次第に平均滞在日数が短くなっていることや、他市場の訪日客に比べ北から南まで日本各地を旅行し、全国的に訪問率が高いこともその特徴として挙げられる（JNTO、2010）。

また台湾からの訪日客による日本という観光旅行先についての評価としては、治安、衛生、交通網などの基本条件が整っているとともに、同じ漢字文化圏であることで安心感があるということがある。また四季の変化にとんだ景観、グルメ、温泉、ショッピングなど多彩な旅行

表1 渡航先別台湾人出国者数

目的地\年	(千人)				
	2009	2010	2011	2012	2013
中国大陆	1,516	2,424	2,846	3,139	3,072
香港	2,261	2,308	2,156	2,021	2,038
日本	1,309	1,377	1,136	1,560	2,346
タイ	258	350	382	306	507
韓国	388	406	423	532	518
マカオ	739	667	587	527	514
ベトナム	264	313	318	341	361
アメリカ	415	436	404	469	381

* 中華民国交通部観光局観光統計年報（2013）により作成

テーマがあり、高い評価を受けている。そのため台湾の旅行社は数多くのツアー商品を作りだし、日本は人気の高い観光地として不動の地位を占めてきた（JNTO、2010）。

これまで筆者らは、このような台湾からの訪日客について研究を進めており、このような特性について確認している。例えば団体旅行については、2010年7月における台北の大手旅行社3社がホームページに示した日本ツアー商品について示すように整理検討した（張・澁谷、2012）。表2はその結果であり、日本ツアーのおおよその全体像が見て取れる。これを見ると、

東京から大阪に移動するような広域ルートよりも、一定の地域内を巡るルートが主体になりつつある。

中でも表3に示したような、黒部立山アルペンルート、北陸の温泉地、白川郷をめぐる中部地方を中心としたルートに人気が集中していた。またその一方で、表4のような東京を中心としながらも、外国人客にはそれほどポピュラーではないと思われる地域や観光目的地に足を延ばすルートがあらわれはじめていた。上述のような「新鮮味」を求めるリピーターの要望が反映されたものとも考えられる（張・澁谷、

表2 台北発訪日ツアー商品の構成とルート例（2010年7月）

	大まかなルート	旅行会社別商品数				日数	価格（台湾ドル）
		A社	B社	C社	合計		
広域型	台北→大阪→京都→箱根→東京→台北	1			1	7	46,800
	台北→箱根→東京→台北	1			1	5	37,900
	台北→東京→箱根→台北		1		1	5	46,900
	台北→東京→箱根→東京→台北			1	1	5	38,990
	台北→神戸→大阪→京都→箱根→東京→台北			1	1	7	48,800
	台北→日光→長野→軽井沢→東京→台北	1			1	5	36,300
	台北→軽井沢→東京→台北			1	1	5	35,900
	台北→東京→軽井沢→草津→台北			2	2	5～7	36,900～47,900
	台北→大阪→京都→立山→松本→名古屋→台北		1		1	6	48,900
	台北→大阪→白川郷→高山→立山→台北			1	1	6	46,900
	台北→福島→日光→東京→台北			1	1	5	44,900
	台北→白浜→大阪→高松→台北	1			1	4	33,900
	台北→高松→大阪→白浜→台北	1			1	4	33,900
	台北→北海道→東京→台北		2		2	6	55,900
	小計	5	4	7	16		
地域型	地域					日数	価格（台湾ドル）
	関東・東京	2	2	1	5	4～5	38,900～40,900
	京阪神	2	2	2	6	5～6	42,900～43,900
	北海道	2	2	1	5	4～6	35,900～55,900
	中部	2	2	2	6	5	35,900～50,900
	中国・四国			5	5	5～6	26,800～43,900
	九州	3	3	3	9	5～6	27,900～43,900
	沖縄			2	2	4～5	21,900～22,900
	小計	11	11	16	38		
	合計						

張・澁谷（2012）を修正。

表3 ツアー商品の事例：「立山と伝統の宿5日間」（台湾・A社）

出発地	台北
ルート	中部地域
価 格	40,900 台湾ドル（約 11 万円）
1 日目	台北より中部国際空港に到着 中部国際空港→琵琶湖→長浜城→山中温泉（或いは山代温泉、金沢） 山中温泉泊
2 日目	山中温泉→兼六園→白川郷→能登半島→和倉温泉（加賀屋） 和倉温泉泊
3 日目	和倉温泉→【立山黒部アルペンルート】立山→美女平→室堂（散策）→大観峰→黒部平→黒部湖 →扇沢→長野（或いは松本） 長野泊
4 日目	長野→上高地→高山→古い街並→免税店→名古屋（自由散策・オアシス 21、栄地下街） 名古屋泊
5 日目	名古屋城→中部国際空港 中部国際空港より台北に出発

張・澁谷（2012）を修正。

表4 ツアー商品の事例：「日光軽井沢5日」（台湾・A社）

出発地	台北
ルート	関東地域
価 格	36,300 台北ドル（約 10 万円）
1 日目	台北より成田空港到着 成田泊
2 日目	成田→大谷資料館→大谷石観音→日光東照宮→輪王寺→二荒山神社→龍王峡→鬼怒川温泉 鬼怒川温泉泊
3 日目	鬼怒川温泉→中禅寺湖→沼田吹割滝→夏の果物狩り（桃・桜桃・苺など）→坂東十六札所→伊香 保水沢観音→草津湯田足湯体験→軽井沢 軽井沢泊
4 日目	聖パウロ教会→軽井沢銀座→高崎達摩寺→台場→レインボーブリッジ→アクアシティお台場 （ショッピング） 東京泊
5 日目	自由活動→成田空港 成田空港より台北に出発

張・澁谷（2012）を修正。

2012)。

また筆者らは、比較的人気のある中部地方を巡るルートの中にある、岐阜県高山市の外国人訪日観光客の動向について検討したが、その際に高山を訪れる多くの観光客が、台湾から訪れる団体旅行客と、英語圏やヨーロッパなどから訪れる個人客に大分され、同じ観光地を訪れながらその行動についてはかなりの相違がある点を指摘した。その中で、台湾からの団体観光客

は高山だけを目的にしていなかったため、ある意味では「通過客」であるが、次第に個人旅行で訪れる者が見られるようになっていくことが理解された（澁谷、2013a、2013b）。このような視点で見ると、上記の台湾からの訪日観光客の特性が、個人客のものであるのか、団体客のものであるのかについて検討する必要性があるだろう。

3. 旅行社とガイドの語る台湾からの日本観光

次に、筆者らによる台湾の旅行社やツアーガイドのインタビューを中心にしながら、台湾側の観光業界の抱く日本観光旅行の動向について整理しておきたい。ここでは、台湾の中規模の旅行社の経営者（2010年3月）と、スルーガイド（添乗員）（2011年3月）へのインタビュー内容を軸に述べてゆく。

(1) 旅行社の経営者

台北市内にある中規模の旅行社であるM旅遊の董事長であるA氏によると、そもそも台湾において旅行社が扱うツアー商品は、自社のみで単独に募集するツアー商品と、複数の旅行社で共同募集する商品の2つに分けられる。後者は、共同で募集して人数が多くなる分、チケットやホテル代なども安くなり、ツアー自体の価格を下げるができるという。

日本へのツアー商品については、近年円高によって金額が上がったため（2011年当時）、客が減りはじめており、とにかく金額を安くする必要があり、複数の旅行社が共同で募集することは重要である。台湾におけるパッケージツアー商品は、何よりも金額が問題であり、消費者は少しでも安いほうを選択するようである。

近年の台湾からの日本観光の様相については、客はやや減少しているものの、依然として人気旅行先であり、東京、大阪、福岡などの大都市に向かう飛行機が満席となり、チケットがとりにくいほどであるという。ツアーを主催する側から見ても、日本観光は雪、桜、紅葉など、1年中売ることが可能であり、もちろん工芸品などの土産物、ホスピタリティも素晴らしいという印象である。

台湾の若年層はそもそも日本が大好きな人々が多く、チケットのみを旅行者で手配し自分で個人旅行をしたり、航空券とホテルだけがつい

た自由旅行を選択したりすることが多い。一方で年配の人々も日本観光はしているが、たいてい日本には何回も観光に行っており、日本語もできることが多く、言語の障壁も小さいが、すでに、北海道から九州まで日本のいろいろな地域に行きつくしてしまったことと、年齢が上がったため次第にいろいろと足を延ばせなくなっている。このような年配の人々はかつて、日本統治期（日抛時代）の学校の同窓会として日本旅行を経験しているケースがある。A氏が関わった台北市内の中学校のケースでは、当時の日本人の先生も呼んで、日本に団体観光旅行をしたという。

A氏によれば、日本観光ツアー商品のルートも次第に変化しているとされる。現在人気ルートの一つである飛騨高山など中部地方をめぐるルートがあるが、数年前は中部空港をはじめとした中部圏の空港発着ではなく、大阪から入国し、およそ1週間の旅程で、大阪→名古屋→妻籠・馬籠→高山→白川郷→北陸→黒部立山アルペンルート→軽井沢→東京というルートを取り、東京から出国していた。以前から大阪→東京を抜けるルートがあり、これと中部地方の観光を結びつけたものであった。最近はそのような長いツアーではなく、せいぜい4～5日の旅程になってきており、大都市周辺で4日間、あるいは5日間のツアーが主体である。

上記のツアーのような中部地方の観光地については、比較的良い評価があるという。白川郷は世界遺産でもあるとともに、日本の「代表的景観」として、高山も古い日本、あるいは「いなか」を見ることができる街としてそれぞれ高い評価を得ているとされる。また北陸地方を中心とする温泉も、「台湾より衛生的」であると感じられ、また露天風呂の評価が高いようである。

なお、このようなツアーには、「スルーガイド」が必ず必要であるとのことである。このような人々は「ガイド」と認識され、日本でいう「添乗員」

ではあるが旅行社の社員ではない。彼らはこのようなツアーに1名だけ添乗して行き、日本に行くのであれば、日本語がかなりの程度話すことができる。これは一面ではコストの問題でこのようなスタイルをとっている。日本の旅行社をカウンターパートにすると値段が高くなり、何かと時間がかかることが多いためである。

そこでこのようなツアーを行う際には、台湾の旅行社でバスとホテルだけを予約しておき、スルーガイドは現金を持ち歩き、現金でホテル、バス会社に支払いをするという。現金で支払いを行うため、日本の業者はかえって喜ぶそうである。これ以外に夜中に電話をしてくるツアー参加者の世話まで含めて、すべてこのスルーガイドが一人で差配せねばならず、かなり神経を使う大変な仕事であると認識されている。A氏もかつてスルーガイドを経験したことがあるという。しかしこのようなスルーガイドの収入は、ツアー参加者の支払うチップだけであり、おおよそ旅行日数に応じて支払われるという。

(2) 「スルーガイド」

このA氏によって示された「スルーガイド」(添乗員)についても筆者らは2012年3月にインタビューを行った。上述のように、スルーガイドは、いわばフリーに近い職業で、旅行社がガイドを選び、依頼することとなる。また旅行者主催以外の団体旅行では、参加者からガイドが指名されることもあるという。ガイドはいわばフリーランサーとして働いていることになる。そのため、ガイド側から旅行社にルートや訪問地などについてアドバイスすることはほとんどないという。

ガイド歴30年を超えるベテランのB氏、C氏に台湾からの訪日観光について聞くと、前述の旅行社董事長のA氏と同様に、年配の旅行者と若い世代の旅行者に大きく分けられるという見解を述べた。年配の人々は、昔日本統治期に

日本語の教育を受けた人々で、団体旅行で日本を訪れた場合、名所旧跡を訪れ、漬物など日本式の食べ物も問題がない。以前は伊勢神宮に行くツアーもあったという。これに対し若い世代は、きわめて流行に敏感であり、たとえば「北海道の有名なポテトフライが食べたい」など、非常に具体的な目的をもって日本を訪問する。

また、そのような観光に行く世代の変化や、さまざまな状況の変化によって、ルートやスケジュールは変わり続けているということである。前述の中部地方をめぐるツアーなどは、航空券を単純往復にする必要があって一周するようなルートが取られているが、今後到着地と出発地が異なる「オープンジョー」チケットが買いやすくなるということで、ルートが片道型になり、大きな変化があると考えられる。これ以外にも代理店や航空会社の要請によっても、旅行の形態は変化する可能性があるという。

B氏、C氏に中部地方のツアーの動向について聞くと、まず前提条件として多くの場合、名古屋のデューティーフリーショップに行かなくてはならないため、ルートが限定される点が特色とされる。また人気の立山黒部アルペンルートについては、冬季の運休期間が問題とされ、代わりに冬季も営業している新穂高ロープウェイやスキー場を目的地とすることがある。このため、飛騨高山地域は温泉地と合わせて、台湾からのツアーにとって重要な地点であるという。

4. 観光客の語る台湾からの日本観光

次に、ゲスト側から見た日本観光について、やはり筆者らの行ったインタビューの結果を示しつつ、考察を加えてみたい。ここで用いるインタビュー調査結果は、2013年3月、2014年3月に行ったものである。なお、インタビューの対象は、上述のような年配層と、若年層で観光スタイルが異なるという指摘を参考にして選定している。

(1) 団体旅行に参加し季節と景観を楽しむ年配の人々

Dさんは、50歳代後半の台北市在住の既婚女性で、これまで何度も日本への観光旅行をしているが、そのほとんどが団体旅行である。Dさんは、数年前までは母親の介護があったために、ある程度の期間が必要な海外観光旅行は難しかったが、現在は海外旅行を楽しむ時間的余裕が生じている。そのため、現在1年に5回程度海外旅行を楽しんでいる。ここ数年間で日本以外に北欧（フィンランド、ノルウェーなど）、東欧（スロバキア、チェコ、オーストリア）、インド、ミャンマー、中国、トルコ、インドネシア、カナダなど、世界のあらゆる地域に旅行している。日本の観光旅行はその中の一つである。

そのような経験の中で、日本に関しては、雪と桜、紅葉などの景観が素晴らしいという印象を持っている。またかなり以前に家族旅行で日本を訪問したことがあり、その時は大阪から東京に抜けるルートの団体旅行であったが、その際に富士山近くの宿で、家族で桃を食べながら花火を見たことがあるが、それが良い印象として心に残っているという。また近年の日本観光

旅行では、これまで行ったことのない地域を訪問してみたいと考えたそうである。

インタビューをした時期までに、Dさんは2008年秋と2009年春に中部地方の団体旅行に参加しており、特にその際の旅行について以下に記してゆく。

2008年秋（10月下旬）には、親戚の勤める職場で、日本に行くオーダーメイドの団体旅行を行うことになり、それに参加した。グループの人数は40名程度であり、その時のツアー名称は「飛騨黒部立山上高地新穂高五日」であった。

表5は、Dさんの保管していた旅行社作成の資料をもとに、団体旅行の概要について整理したものである。これを見ると4泊5日の日程で、中部国際空港から入国し、名古屋、高山、白川郷、金沢と日本海側に抜け、その後黒部立山アルペンルートを経て、長野県松代温泉、上高地、新穂高を経て再度中部国際空港から出国するルートであった。なお移動はすべて観光バスによるものであり、免税品店に寄ることも含め、第2章に示した、中部地方をめぐる典型的なパッケージツアーのルートと訪問地で構成されている。「領隊」と記される添乗員名が1名記されて

表5 Dさんの参加した日本ツアー日程「飛騨黒部立山上高地新穂高五日」（2008年10月）

月日	スケジュール	食 事	宿 泊
10/23	台北 7:55 (BR2128) → 11:40 中部国際空港 中部国際空港→名古屋城→オアシス 21・久屋大通・栄→高山（泊）	朝：機内食 昼：名古屋風の食事 夕：温泉懐石料理（ホテル内）	VILLAGE 荘川高原
10/24	高山→白川郷合掌村（長瀬家を見学）→白山林道（紅葉・滝）→金沢兼六園→金沢（泊）	朝：ホテル内 昼：和風定食 夕：日本式の食事	金沢エクセル東急H
10/25	金沢→黒部立山アルペンルート（六種の異なる交通機関に搭乗）→扇沢→松代（泊）	朝：ホテル内 昼：立山での食事 夕：温泉懐石料理（ホテル内）	松代ロイヤルホテル
10/26	松代→安曇野わさび農場（黒沢明の映画ロケ地）→上高地→新穂高ロープウェイ→免税店→名古屋（泊）	朝：ホテル内 昼：飛騨料理 夕：セットメニュー	名古屋国際ホテル
10/27	名古屋→中部国際空港 中部国際空港 12:35 (BR2127) → 15:00 台北	朝：ホテル内 昼：機内食	

* H社主催の予定表を筆者が加筆修正したもの。

おり、注意事項に「給付小費」の項目があり、「苦勞をして皆さんのお世話をするガイドは、実質的にみなさんのチップが主要な収入であるので、運転士へのものも含め、一日当たり250台湾ドルのチップ（計1,250台湾ドル）を準備することをお勧めしています」と記されている。そのため、この添乗員は上述のいわゆる「スルーガイド」であることが理解される。またこのツアーに限って言えば、4泊5日のガイドで日本円にして15万円程度の収入があることになる。

旅行社の資料には、「行程特色」として、このツアーの見どころを記してある。全部で8つのポイントについて記され、順に①黒部立山アルペンルート、②白川郷、③金沢兼六園、④新穂高ロープウェイ、⑤安曇野わさび園、⑥上高地、⑦白山スーパー林道の紅葉、⑧名古屋城について、見どころが説明されている。この順序が評価を示すものではないかもしれないが、やはり日本アルプスの景観を楽しむことのできるアルペンルートと、世界遺産の白川郷が最初に示されている。また全体として自然・人文景観を楽しむ旅行として設計されているようにも思われる。またこの「行程特色」には記されない

が、宿泊地として松代温泉などの温泉ホテルが旅程に組み込まれている。

なお、この旅行でDさんは、これまであまり行ったことのない日本を訪れ、時期的に紅葉と雪の景観が好印象であった。またそれまでに日本を訪れた経験もあるためか、食事や温泉なども問題なく楽しむことができたという。

Dさんは、このような10月下旬の旅行に参加した後、今度は春の時期に同じ地域を再訪しようと考え、翌年4月の桜の季節に友人と旅行会社のパッケージツアー商品を選んで、やはり中部地方を訪れた。表6は、Dさんが2009年4月に参加したツアー「北陸立山雪壁、合掌村、温泉美食5日遊」の日程表である。これを見ると、黒部立山アルペンルートと白川郷を軸とするのは変わらないが、4月ということで、ルート上の近隣にある高遠、兼六園、恵那峡など桜の名所を選んでいる。アルペンルートはちょうど交通制限解除の日に訪問している。これは、除雪をした後の高い雪壁の間をバスが通行するいわゆる「雪の大谷」をもっともよく見ることができるとの時期である。また長野県の馬籠宿も訪問地に組み込まれている。

表6 Dさんの参加した日本ツアー日程「北陸立山雪壁、合掌村、温泉美食5日遊」（2009年4月）

月日	スケジュール	食 事	宿 泊
4/16	台北 8:00 (BR2128) → 11:45 中部国際空港 中部国際空港→名古屋城→高遠（桜の名所） →八ヶ岳温泉もしくは白樺湖温泉（泊）	昼：機内食 夕：和風会席料理	SKY PARK HOTEL
4/17	八ヶ岳温泉もしくは白樺湖温泉→黒部立山アルペンルート（六種の異なる交通機関に搭乗） →金沢（泊）	朝：ホテル内 昼：立山和風定食 夕：ビュッフェ	金沢エクセル東急H
4/18	金沢→金沢兼六園（桜の名所）→東山茶屋街 →五箇山トンネル→白川郷合掌村→高山市街 散策→荘川温泉（泊・桜の名所）	朝：ホテル内 昼：高山朴葉味噌定食 夕：ビュッフェ	荘川温泉 OHAYOSAN 温泉ホテル
4/19	荘川温泉→木曾路→馬籠宿→恵那峡（桜の名所） →中津川→免税店→名古屋（泊・栄地下街）	朝：ホテル内 昼：和風料理 夕：自由行動	名古屋ヒルトンホテル
4/20	名古屋→熱田神宮→中部国際空港 中部国際空港 13:00 (BR2127) → 15:00 台北	朝：ホテル内 昼：機内食	

* S社作成の予定表に筆者が加筆修正したもの。

Dさんによると、このツアーは20名程度の参加者でやや少なめであったが、桜を見るときには非常にエキサイトして盛り上がったとのことである。その一方で、白川郷は食事の時間などがあり、十分に見学時間が取れずもう少し自由な時間が欲しいと感じたようである。また、アルペンルートの「雪の大谷」は非常に良い評価を得ている。Dさんは、最近台湾のTV番組で白川郷の合掌造りの家に宿泊する様子を見たためもあり、雪の白川郷を再度訪問したいと考えている。日本は言葉の問題もなく漢字があるので不便をそれほど感じないそうであるが、個人旅行で訪問しようとは考えていない。

Dさんの旅行経験からは、さまざまな台湾からの訪日客の嗜好、ひいては台湾の社会的背景の一端が感じられる。雪や桜、紅葉などに好印象を持ち、特に日本においては、季節の風物詩ではあったものの、それほどは注目されていなかった立山黒部アルペンルートの「雪の大谷」に高い評価が行われていることなどは、そのよい例であると思われる。さらには、Dさんのようなやや年配の訪日客が、何度日本を訪問しても個人旅行に移行しようと思わないという点や、すでに二度も訪問している白川郷に再度行ってみようと考えている点などは、「なぜ来るのか」などをはじめとして、台湾からの訪日客を理解する上で重要であるだろう。また様々な海外旅行をする中に日本観光旅行が含まれている点、そのような旅行をするDさんが子供から手が離れ介護が終わるなど余裕ができた年齢層である点などは、台湾の人々のライフスタイルなど、訪日旅行に至る社会的背景を知る上で重要であると思われる。

なお、Dさんの参加した団体旅行の参加者用資料からは、スルーガイドの役割、ツアーのルートや訪問地の特徴など、台湾からの団体旅行のスタイルが理解できる。中部地方のツアーにおいては、パッケージツアー、オーダーメード

の団体旅行の双方とも、黒部立山アルペンルートと白川郷を軸とする一周ルートが組まれることや、桜のシーズンには高遠、中津川などの特別な場所が訪問地になることなども理解できる。

(2) 「趣味」の個人旅行をする若者

次に、日本に個人旅行で訪れる若年層の観光スタイルについて、インタビューをもとに述べてゆきたい。インフォーマントのEさんは、20代の未婚女性で大学の芸術系学部に通っており、これまで日本に個人旅行で3回訪れている。本人の日本語のレベルは高いが、特に日本語学科にいるわけではなく、日本留学経験もない。ここでは、彼女の2回の東京への個人旅行について検討したい。

Eさんの2回の東京旅行は、全てある日本のバンドのライブを見ることが主たる目的である。彼女は子供のころに台湾で見た日本製のアニメーション（1999年頃放映）の主題歌を通じてこのバンドのファンになり、大学生になってからは、個人旅行で日本に赴き、ライブを直接見に行くようになった。

Eさんは2008年に1回目の個人訪日観光に訪れている。この時彼女は19歳で、ライブを見に行くため、3日間の個人旅行で東京を訪れた。この際には、初めての個人旅行であったこともあり、2日目の夜（17～21時）のコンサートが中心であり、それ以外の行動はそれほど多くなかった。到着した1日目に上野公園、日比谷公園を訪れ、3日目に渋谷のギター店に足を運び、ファンであるバンドのメンバーが使っているギターを見に行った程度であった。なお宿泊には上野にある安価な宿泊特化型ホテルを利用した。しかしながら、普通の訪日客が言葉の障壁が問題になるのに比して、Eさんは小学校のころから日本アニメを見ながら日本語を勉強してきたため、この時点ですでに旅行会話にはほとんど問題がなかったという。

次いで2010年8月に、再度Eさんは8日間の日程で日本を訪問する。この時もやはり日本のバンドの2日連続のライブに行くことが主目的であったが、友人と2人であったことと、夏休みであったことから、やや長めに遊びたいと考えたようである。宿泊は一般のホテルではなく、東京で台湾の人が経営する民宿を利用した。この時には、コンサートだけではなく、さまざまな場所を訪れている。コンサートのあった渋谷はもちろんであるが、買い物（ネイルシール、服）や「日本にしかない」クレープ（写真1）を食べるために原宿を訪れ、新宿にはデパートとゲームセンターに行くために足を延ばしている。ゲームセンターでは、特定のキャラクターのぬいぐるみをゲーム機で取るために行ったとのことである。さらにアニメーション・コミック・ゲーム関連用品販売店の「アニメイ

ト」に行くために池袋に、また日本のアニメ、ドラマの舞台として知っていた明治神宮も訪れている。さらにはディズニーランドも訪れている。1回目の旅行に比して、期間も長いいためか、コンサート以外にも精力的にいろいろな場所を訪れている。

さらに2012年2月には、Eさんはやはりライブ（写真2）を見るために、5日間の日程で東京に3回目の訪問をしている。この際は1人での訪問であった。宿泊は池袋にある比較的安価な宿泊特化型ホテルを選択している。5日間の日程のうち、2日目と3日目にコンサートがあり、1日目にはバンド関係のイベントにも参加している、このイベントには日本留学中の友人と2人で参加したとのことである、2回目の訪問と同様に、コンサート以外の時間は、自分の趣味やショッピングなどを楽しんでいる。前



写真1 「台湾には無い」クレープ (Eさん撮影)



写真3 Eさんが東京で訪れた牛タンの専門店 (Eさん撮影)

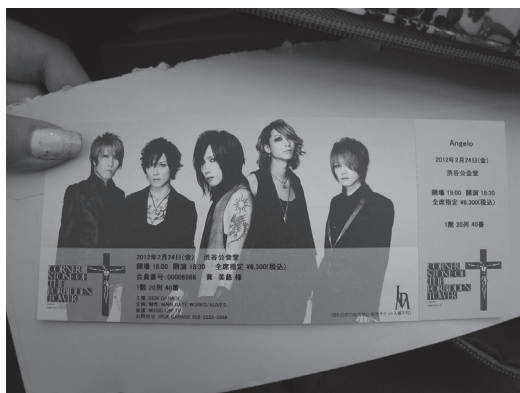


写真2 Eさんの訪日目的のライブチケット (Eさん撮影)



写真4 Eさんが東京で訪れたラーメン店 (Eさん撮影)

回行った新宿のゲームセンター、池袋のアニメイト、原宿のネイルシールの店に再訪している。これに加えて今回は、根津にある「有名な」「牛タンのお店」で食事をして（写真3）、秋葉原のカラオケに行き、アイスクリームを食べ、友人の誕生日会のためにお台場も訪れている。それ以外に、「外国人も注文しやすく、台湾人の口に合う」とんこつラーメン店（写真4）や和食店でも食事を取り、「日本にしかない」クレープとプリンを毎日のように食べている。Eさんによれば、このような食事については、「台湾にないものが重要」とのことである。

このような3回の東京への訪問に際して、主たる情報源は、ネット（台湾の日本旅行ブログなど）と友人、同じバンドのファン（日本人含む）からの情報であるという。周囲に日本に旅行に行ったことのある友人も多く、東京の旅行情報には事欠かないようである。また最近では台湾出発時に日本で利用できるWiFi用のルーターを借りていくことにしており、日本到着後もネット情報を利用することがあるという。

Eさんの3回の個人旅行を見ると、前述の年配層の団体旅行とはかなり性格を異にしている。特にEさんの場合は、日本のバンドのファンであり、そのコンサートに行くという目的がある。その余った時間にアニメ・ゲーム・ファッションに関する場所を訪れ、さらに日本ならではの食べ物（スイーツ含む）を体験するという旅行スタイルである。

第3回の旅行になると、第1回の旅行に比べ、中心となる日本音楽への趣味関心が主体であるものの、次第にそれ以外のアニメ、グルメ、コミックなど日本への関心に沿って目的が広がっていくというような印象がある。また、このような台湾の若者は、「日本の楽しみ方」を知っている人々であるとも言え、今後もこのような若い個人旅行者がリピーターとして日本を訪れるものと思われる。なお、Eさんによると、近

年台湾において最近、いわゆる「韓流ファン」も増加しつつあり、ここで扱ったEさんの日本旅行と同様に、コンサートなどを契機として韓国に旅行に行く若者も多いとのことである。このことから、サブカルチャーを軸とした東アジアにおける若年層の観光流動の一端もうかがえる。

5. まとめ

本稿では、台湾の観光業関係者と、日本旅行経験者へのインタビューという具体的な事例を示しながら、台湾からの訪日客の観光行動の特性について検討してきた。

台湾の旅行社やガイドに対するインタビューからは、台湾から日本への観光旅行者が「日本好き」の若者と、日本統治時代を経験した年配の人々が好むイメージがある点が理解された。また当然のことかもしれないが、パッケージツアー商品は状況につれてかなりの変化があり、今後もルートや訪問地の変化がみられる可能性も理解できた。また、台湾においては海外ツアーには、フリーランスと思われる「スルーガイド」が差配をする例が多いものと思われ、少なくとも日本へのツアーには日本語が堪能なスルーガイドが重要な役割を果たしていると思われる。

2名の日本観光旅行経験者へのインタビューを見ると、観光業関係者のコメントと同様に、前者の年配の人々の団体旅行と、後者の若者の個人旅行にはそのスタイルにかなり大きな違いがあることが理解される。特に、前述の台湾からの訪日客の特性のうち、「日本国中のさまざまな地域を訪問する」というのは前者の特性であり、後者のものではないように思われる。後者の日本観光は、いわゆるコンテンツツーリズムに近い、自らの趣味のための旅行であることは非常に大きな特色である。また日本の流行やサブカルチャー、グルメ情報などに非常に詳しいことも、その特色を描き出すために重要な点

であるだろう。他方、日本旅行のリピーターであることや、日本への親しみが日本観光の基礎的条件になっているところなどは、両者に共通していると思われる。

このうち年配層の日本観光の姿について、本稿で検討してきたことを土台に、やや推測も交えながら述べると、次のように整理されるだろうか。リタイアしたか、子育て・介護から手の離れた年配層が、生活上の余裕がある場合に、同世代の友人や職場の同僚、あるいはその関係者と、さまざまな海外団体旅行をするが、そのうちの比較的参加しやすい旅行先の一つが日本となる。日本には、スルーガイド（添乗員）付きのツアーに何度も参加し、観光バスで都市だけではない日本各地の景勝地・温泉・季節の風景（雪や桜）が楽しめる場所などを巡り、個人旅行についてはあまり関心がない。旅行に関する情報は、主として旅行社から得ることが多く、ツアー商品を選ぶ際には、内容もさることながら価格を重視する。

他方、若年層の個人旅行について同様に整理するならば、次のようになるだろうか。大学生や20代の若年層で、趣味として日本の音楽・アニメ・ゲーム・ドラマなどのサブカルチャーに強い関心を持つ人々が、1人、あるいは少数の友達と、東京や京阪神などの大都市圏を個人旅行で訪れる。日本の情報は、ネット情報や口コミから得ることが多く、出発前になかな情報収集をしてから出発する。日本では、自分の最も関心のある分野のイベントを軸とするが、それ以外の日本のサブカルチャーや、食文化などにも関心を持って精力的に目的地を回る。若年層であることもあり、価格の安い民宿や宿泊特化型ホテルを利用する。また日本語がある程度以上出来る者も多い。

なお、このような特性をもつと推測される若年層の訪日客の観光スタイルは、前述のようにコンテンツツーリズムに近いものがあり、イン

フォーマントのEさんも同じバンドグループファンの日本人の友人がいるなど、国籍を超えるネットワークが存在している。また筆者らの手元に東京のアニメ、フィギュア関連店舗をまとめたガイドブック『東京3C 動漫御宅本』や、東京の流行の場所を掲載した『東京攻略完全制覇』があることから、おそらくは台湾からドラマファンのロケ地めぐり、アニメファンの「聖地巡礼」なども存在するものと思われ、例えば岡本（2013）の示す「n次創作観光」の担い手が日本国内だけにとどまらないことも予想される。またこれは台湾だけにとどまらず、韓国などにおいても若者による、日本音楽やアニメなどの趣味を軸とした訪日旅行が行われている可能性が高い（澁谷、2011）。

上に示した訪日観光客像は、少ないサンプルから推測も交えて述べた筆者らのイメージであり、過度の抽象化、調査不足、そして誤りもあるかもしれない。しかしながら、台湾からの訪日観光客の一面は捉えているのではないかと考える。他方で、台湾からの訪日観光客は30代が最も多いとされているが、これらの人々の訪日観光については筆者らも十分にとらえられなかった。今後、インタビューや様々な方途を試行しつつ、その全体像に迫ってゆきたい。

またさらに観光業関係者のインタビューから、日本統治時代に日本教育を受けた人々が日本旅行をした事例など、過去の日本観光について知ることができたが、スルーガイドの役割など、現在のツアー商品団体旅行の基礎がその時期に形作られた可能性があり、台湾からの日本観光旅行史についても今後稿を改めて検討してみたい。

【追記】

台湾における調査の際にご協力いただいた方々と、コーディネートをお願いした本学卒業生のLさんにこの場を借りて感謝申し上げたい。

また本稿は、平成25～26年度中部大学特別研究費「中部圏の観光ルート「昇龍道」中の観光地に対する外国人客の評価—華人系バスツアー客と欧米・英語圏からの個人客を中心に」の一部を使用した。

【参考文献】

- 岡本健（2013）：『n次創作観光 / アニメ聖地巡礼 / コンテンツツーリズム / 観光社会学の可能性』、NPO 法人北海道冒険芸術出版
- 香川眞編・日本国際観光学会監修（2007）：『観光学大事典』、木楽社
- 神田孝治編（2009）：『観光の空間—視点とアプローチ』、ナカニシヤ出版
- 日本政府観光局（2010）：『国際観光白書 世界と日本の国際観光交流の動向』、財団法人国際観光サービスセンター
- 澁谷鎮明（2011）：韓国の観光ガイドブックに見る東京の観光空間—『ドラマイン東京』・『マニアック東京』の特別な場所—、貿易風（中部大学国際関係学部紀要）7、pp105-125
- 澁谷鎮明（2013a）：外国人向け宿泊施設の情報交換ノートに見る訪日個人客の観光行動と観光地の評価、第28回日本観光研究学会全国大会学術論文集、pp.341-344
- 澁谷鎮明（2013b）：ふたつの高山—海外からの団体ツアー客・個人客の視点と観光行動—、貿易風（中部大学国際関係学部紀要）9、pp234-247
- 張娜・澁谷鎮明（2012）：訪日パッケージツアー商品から見る華人観光客の訪問地と観光ルート、貿易風（中部大学国際関係学部紀要）8、pp223-242
- 日本政府観光局（2009）：『JNTO 訪日外客訪問地調査 2007/2008』、国際観光サービスセンター
- 日本政府観光局（2009）：『訪日外客訪問地調査』、財団法人国際観光サービスセンター
- 李若姪・李芷珊・林麗純（2010）：『東京3C動漫御宅本』（中文）、宏碩文化
- 山本興治（2004）：韓国人訪日バックツアー分析—韓国アウトバウンド観光ヒアリング調査を中心に—、閩門地域研究 13、pp61-80
- MOOK 編集部（2009）：『東京攻略完全制覇2010～2011』（中文）、宏碩文化